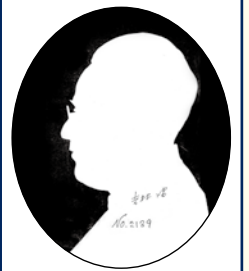


吉村昭記念文学館 ニュース 万年筆の旅



vol.11

平成30年10月31日発行
登録番号(30)0053号
編集・発行／荒川区
問合せ／
荒川区地域文化スポーツ部
ゆいの森課
吉村昭記念文学館
〒116-0002
東京都荒川区荒川2-50-1
TEL.03-3891-4349

題字／津村節子氏
切絵／山崎達郎氏
【開館時間】
9時30分～20時30分
※企画展は17時まで
【休館日】
毎月第三木曜日・特別整理
期間・保守点検日・年末年始他
【入館料】
無料

おしどり文学館協定締結一周年記念 荒川区・福井県合同企画展 「津村節子展 生きること、書くこと」

会期：平成30年10月20日(土)～
12月19日(水)

昨年11月5日に、吉村昭記念文学館と福井県ふるさと文学館はおしどり文学館協定を結びました。この度、締結一周年を記念し、ゆいの森あらかわ名誉館長および福井県ふるさと文学館特別館長を務める津村節子氏の合同企画展を開催することとなりました。今年で90歳を迎えられ、現在も精力的に執筆活動を続ける津村氏の約60年におよぶ創作活動を、様々な資料とともに振り返ります。津村氏がどのように生き、作品にどんな思いを込めて書いてきたのかを、自筆原稿や構想メモ、愛蔵品などを通して紹介します。

女性の「生」を書き続けて

植物はそれに適した土壌に生育するように、厳しい気候風土に生れた人たちは自分の道を貫く意志が強くなくては生きられない。私が書きたいのはそういう人たちである。

津村氏は、昭和3年(1928)、福井県福井市に生まれました。読書を好む幼少期を過ごし、やがて作家を志します。昭和26年に学習院大学短期大学部に入学すると、

(企画展図録巻頭言より)



自ら編集・発行人となり雑誌「はまゆふ」を創刊しました。同時に、大学の文芸部にも所属し、創作に励みます。昭和28年、同じ文芸部員だった吉村昭と結婚し、長い同人雑誌時代を経て、昭和39年に「さい果て」で新潮社同人雑誌賞を受賞。翌年には「玩具」で芥川賞を受賞し、作家としての一歩を踏み出していました。以後、数々の文学賞を受賞しています。

貴重資料を一挙公開

- 短大時代の文芸部雑誌「はまゆふ」
- 芥川賞受賞作「玩具」の自筆原稿
- 作品の創作背景がわかる取材ノート
- 吉村昭からの手紙
- 文壇デビュー前に連載していた少女小説
- 執筆道具や愛蔵品の数々

津村節子氏が 紺綬褒章を受章されました



授与された褒章と褒状
平成30年(2018)3月31日

この他にも、普段なかなか目にすることのない貴重な資料を一挙に公開します。この機会に是非ご観覧ください。

第1回 トピック展示開催報告

吉村昭と内藤初穂
「戦艦武蔵」がつなぐ友情

7月から、2階常設展示室の著作閲覧コーナーで、「学芸員一押し」として、当館所蔵資料を中心にトピック展示を開催しています。今回は、9月19日(水)まで開催した「吉村昭と内藤初穂―戦艦武蔵―がつなぐ友情―」についてご紹介します。



吉村昭(左)と内藤初穂(右)

「戦艦武蔵」と内藤初穂

「星の王子さま」の翻訳者で著名な内藤初穂の長男で、作家の内藤初穂は(1921〜2011)、吉村の親しい

友人でした。

その出会いは、昭和30年代にさかのぼります。仲介したのは、吉村の友人であり内藤と旧知の仲だったロシア文学者の泉三太郎(山下三郎)でした。当時、内藤は日本工房という企業PR誌を手掛ける会社を経営していました。日本工房では、三菱重工(株)長崎造船所の社史を編纂した関係から「戦艦武蔵」建造日誌の複製を所蔵していました。この日誌を見せられたことが、代表作「戦艦武蔵」誕生のきっかけとなります。さらに、内藤は「武蔵」の建造に携わった三菱重工の技術者たちを吉村に紹介するなど、「戦艦武蔵」執筆にあたって重要な存在でした。

後年、内藤が編集委員を務めた「戦艦武蔵建造記録」(平成6年、アテネ書房)刊行案内のチラシには、吉村による推薦文「敬意と感謝」が掲載されました。

内藤初穂との交遊

吉村にとって内藤は「年長の友人」であり、内藤にとっては「畏友の作家」でした。二人は傍目にも大変仲が良く、長崎の万年筆屋では、漫才のような会話が繰り広げられていたそうです。吉村は、内藤の著書『太平洋の女王 浅間丸』(平成10年、中公文庫)の解説を記し、『トーマス・B・グラバー始末』(平成13年、アテネ書房)刊行後のシンポジウムでは、パネリストを務めました。

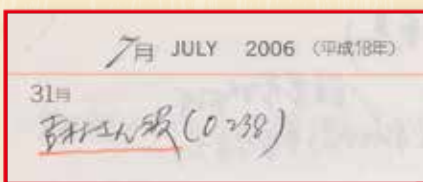
吉村の病と死

平成18年(2006)1月、脾臓ガンが発見された吉村は入院することになりました。吉村は親しい人々にも自分の病を徹底的に秘し、それは内藤に対しても同様でした。

入院直前に、内藤の『星の王子の影とかたち』(平成18年、筑摩書房)の帯への推薦文を出版社から依頼され、吉村はすべてのゲラに目を通し、原稿を書き上げました。その後も、内藤と吉村はFAXで連絡をとりあい、『星の王子の影とかたち』については、『濯先生の翻訳も、内藤さんの作品も、詩であったことが、私には爽やかでした』(内藤初穂「あとがきに代えて」『戦艦大和へのレクイエム 大艦巨砲の技術を顧みる』平成20年、グラフィック)と吉村から感想を寄せられたといわれています。

平成18年7月31日午前2時38分、吉村は帰らぬ人となりました。当時の内藤の手帳には「吉村さん没(0238)」と記されていました。

《学芸員 加藤陽子》



内藤初穂自筆手帳

第2回 トピック展示のお知らせ

津村節子『智恵子飛ぶ』の世界

〜高村智恵子と夫・光太郎の愛と懊悩〜

前期：平成30年9月21日(金)〜
同年11月14日(水)

後期：平成30年11月16日(金)〜
同31年1月16日(水)

※会期中展示替えあり。
場所：2階常設展示室

著作閲覧コーナー

※但し、第3木曜日、12月7日(金)・12月29日(土)〜平成31年1月4日(金)午前は休館。

「秘書だけが知る 瀬戸内寂聴の素顔」

瀬尾まなほ氏講演会

日時：平成30年6月10日(日)14時～15時
場所：ゆいの森あらかわゆいの森ホール

瀬戸内寂聴氏の秘書で『おちやめに100歳！ 寂聴さん』（平成29年、光文社）の著者でもある瀬尾まなほ氏をお招きしました。瀬戸内氏と瀬尾氏は、66歳の年齢差を越えて、心通い合う関



講演を行う瀬尾まなほ氏

係を育まれています。人生で最良という瀬戸内氏との出会いの中で学んだことや、身近で接するからこそ感じられるその素顔をお話いただきました。

瀬尾氏は、大学卒業後に寂庵に就職され、平成25年(2013)以降、秘書業務を一人で担当されています。瀬戸内氏の精力的な活動の根源には、生涯小説を書き続けたという、揺るぎない創作への信念と情熱があるとお話しになりました。また、常に忘己利他の精神で社会問題に向き合い、自ら現地に駆けつける瀬戸内氏の姿勢を紹介されました。その上で、現在瀬尾氏が理事を務める「若草プロジェクト」での困難を抱えた若い女性や少女たちを支援する活動にふれて、自己と社会との関わりを考え、取り組むことの重要性について言及されました。今後も、瀬戸内氏の執筆をサポートし、若者と瀬戸内氏との懸け橋になり、その魅力を伝えたいと力強くお話しになりました。

※「万年筆の旅」7号には、吉村昭記念文学館開館イベントの際に届いた「瀬戸内寂聴氏」デオレター 吉村昭・津村節子「を語る」を掲載しています。

「読書を愛するまち・あらかわ」宣言 関連展示



荒川区は、これまで取り組んできた読書環境の整備や、読書活動推進事業の精神を未来につなげ、誰もが読書を楽しみ、学び、心豊かに暮らしていただきたい、という思いから「読書を愛するまち・あらかわ」宣言を5月27日に行いました。宣言文では、読書の効用を「心の栄養」「夢のタイムマシン」「魔法の磁石」の3つに分けて説明をしています。このテーマに合わせて、5月23日(水)から7月18日(水)まで、常設展示室内の著作閲覧コーナーで関連展示を開催しました。



吉村昭自筆校正稿「一人旅」
山口昭男氏蔵

「心の栄養」

考える力身につけ、人生を自ら切り拓いていく力を育む

『吉村昭 昭和の戦争』全6巻
(平成27年、新潮社)

吉村の戦史小説は、「あの戦争」は何だったのかを自問自答しながら執筆されました。今を生きる私たちに「戦争とは何か、人間とは何か」を問い続ける作品集です。

「夢のタイムマシン」

あらゆる時代の人々の多様な生き方を知る

『吉村昭歴史小説集成』全8巻
(平成21年、岩波書店)

吉村は、歴史小説について史実をふまえていなければ存在意義がないと考えていました。史実をふまえその時代を生きた人間像を描きだしました。

「魔法の磁石」

人や地域とつながり、世界中の人々の喜び、悲しみ、苦しみ、希望とつながる

『吉村昭自筆校正稿「一人旅」』
(山口昭男氏蔵)

「私のこだわり」というテーマで、出版社から依頼された随筆の校正稿です。「私単独の調査であり執筆であって、旅も私一人である」としつつ、各所で多くの人々に会い、作品は書かれました。

著作紹介
第5回

『彰義隊』



『彰義隊』
(朝日新聞社、平成17年)

左手の谷中本村は土質が適しているの
か良質の生姜を産し、採取期になると
百姓たちが籠にそれを入れて寛永寺に
持ってくる。宮は、それも好んで口に
していた。

— 中略 —

歩行は困難で、宮は何度も水の中に膝
をつき、顔も泥水でよごれた。

付近一帯は寛永寺の寺領で、宮一行は、
道を進んで三河島村に入っていった。

「名主の市郎兵衛のもとに参りましょう」

竹林坊が、宮に言った。

(『彰義隊』朝日新聞社、平成17年)

『彰義隊』とは 平成30年(2018)か
ら150年前の慶応4年(1868)に
起きた上野戦争を、皇族ながら朝敵と
された寛永寺山主、輪王寺宮能久親王
を中心に描いた歴史小説です。宮を擁
立した幕府側の彰義隊と、朝廷軍との

戦いはわずか一日で終了しました。上
野での戦いの後、雨の中を、宮と彰義
隊は、上野から日暮里、三河島、尾久
へと敗走しました。

吉村は各地へと落ち延びた輪王寺宮
の足取りを辿ることで、幕末から明治へ
と移り変わる時代の真相に迫りました。



北白川宮能久親王(輪王寺宮)像
写真提供 一般財団法人国民公園協会
明治36年(1903)に建立された銅像。北の
丸公園に佇む。

吉村昭と彰義隊 少年時代、上野方面
に遊びに行く時には、日暮里から谷中
墓地を通り、寛永寺境内を抜けること
が多く、吉村は周辺の町にも親しみを
持っていました。家の近くには彰義隊
の屯所だった善性寺があり、敗れた彰
義隊が自分の住む町にも逃れてきたと
いう話を、断片的に耳にしていました。

吉村にとって彰義隊は、幼い頃から身
近にあった歴史の話と言えます。親し
んだ土地に残っていた昔話、調査で得
た伝承から「彰義隊」の執筆を決意しま
した。

あらかわ調査 平成15年に、荒川ふる
さと文化館を訪れ復刻版『三河島町郷土
史』(荒川区立荒川ふるさと文化館、平
成14年)を手に入れます。寛永寺から逃
げる輪王寺宮の動きをさとられまいと
した、江戸城出入りの植木屋や、大百

姓の存在を知り、その子孫の家々も訪
ねました。

吉村が参照した『三河島町郷土史』に
は、所々に赤い線が引かれており、地
名や人名に注意しながら資料を丁寧
に読み込んでいたことがわかります。

取材の日々 自ら取材を行い資料と向
き合う吉村の姿勢は「彰義隊」におい
ても同様で、荒川区周辺での調査後、宮
の足跡を追って奥羽、幕府軍の動きを
さぐって岡山、山口へと旅をしました。
作品の魅力の一つでもある、権力者だ
けでない町人や農民などの細かな描写
は、この徹底した調査・取材を礎にし
たものと言えます。



『彰義隊』執筆に関する資料
紙袋には「輪王寺宮」と書かれている。吉村は、収集
した資料を作品ごとに紙袋に入れて書斎で保管し
ていた。

『彰義隊』の執筆 「彰義隊」は、平成16
年10月から平成17年8月まで、「朝日
新聞」夕刊に連載されました。挿絵は
村上豊氏。連載開始時には「宮の悲愴
な姿に胸が熱くなることもしばしばで、
この素材を得て筆を起こしたことを幸
せに思っている」(『朝日新聞』夕刊、
平成16年10月12日)と語りました。
平成17年2月に舌ガンを宣告されま

すが、治療を受けながら推敲を続けま
した。ふるさとを舞台にしたこの作品
は、吉村にとって最後の長篇小説とな
りました。

《学芸員 北山ゆかり》

吉村昭記念文学館 常設展示図録を刊行しました



文学館の常設展示をわかりやすく
紹介した図録を刊行しました。全
150頁、オールカラー。ご要望
の多かった「吉村作品の舞台と取
材地マップ」を付録としてポス
ターにしました。
図録代金…600円
販売場所…ゆいの森あらかわ1階
総合カウンター

◎ 郵送での購入をご希望の場合は、図録代
金を現金書留又は定額小為替(為替は無
記入・無記名で、送料の切手(一冊購入の
場合は350円)と併せてお送り下さい。
◎ 刊行物名・氏名・住所・電話番号を明記し
たものを同封して下さい。

※友の会会員には無料で贈呈いたします。